



すゝめ

患者さんと慶應義塾大学病院をつなぐ
コミュニケーションマガジン



慶應看護は100年を迎えました

私たちはこれまで、高度で多様化する医療・看護の環境に対応しながら、患者さんのQOL（生活の質）を支え、安心して安全な医療を提供できるよう取り組んできました。これからも時代のニーズに合わせ、患者さんに満足してもらい、信頼される看護を目指して、進化していきたいと思えます。



広報誌タイトル「すゝめ」とは

タイトルは明治5年から9年にわたって出版された17編を数える福澤諭吉の大ベストセラー『学問のすゝめ』に因んでいます。

KEIO
UNIVERSITY
HOSPITAL
Communication
Magazine

Vol. 06
October 2018

ご自由に
お持ちください

慶應看護100年

受け継いでいくこと
進化していくこと



慶應義塾における看護教育は福沢諭吉の教えに導かれ、1918年に初代医学部長 北里柴三郎による「病院の良否を左右するもののひとつは看護婦である」という卓見のもと「看護婦養成所」から始まりました。第1回生は160名の志願者から選抜された54名でした。その後も慶應義塾の精神である「独立自尊」と「実学」を常に重んじ、高度の専門知識と技術の習得、そして専門職としての責務と使命を持った優秀な人材の養成に努めてきました。そして病院開設時より今日まで、看護部は患者さんの最も身近な存在として患者さんやご家族の思いに寄り添い、時代の要請や看護学の発展と併せて、その時代に最も適した看護を実践することを目標にしています。

看護部が特に力を注いできた看護師教育と、外来から病棟そして、退院支援へと引き継いでいる包括看護について紹介させていただきます。

豊かな人間性を持ち、 自律した看護専門職業人を 育成します



看護部教育次長
宗廣 妙子

これまでの100年の軌跡の先に、今そしてこれからの慶應看護があります。私達は、「独立自尊」の精神と「人間尊重」の理念を継承し、時代のニーズに応えながらより質の高い看護を提供し続ける使命があります。

看護は、看護師が実践する行為を通して患者さんに提供されます。故に看護を提供するその人自身を反映するともいえます。そのため、看護師は高い専門知識や技術・実践力、科学的な思考だけでなく、共感や労わり、尊重など、ケアに必要な心や高い感性を持つことも重要です。看護部では、独自の教育体制を築き、その様な能力や要素を養うための教育と、「自ら考え行動し、専門職業人として自己を高めること」のできる人材（看護師・助産師）の育成に力を入れてきました。更に、患者さんやその生活の視点に立った医療を提供できる様、多職種チームの中で専門職として役割発揮できる能力の向上に努めます。73年前、激しい空襲の中180名の入院患者さんを無傷で避難させ、命を守り抜いた先輩達の専門職たる覚悟と姿勢に倣い、激変する今の社会において、看護専門職としての自覚と覚悟、豊かな人間性を持った人材の育成を目指していきたいと思えます。

患者さんが住み慣れた地域で 自分らしく暮らせるように、 地域と連携した看護を提供します



医療連携推進部課長
看護専門領域担当部長
片岡 美樹

今から20年前、入院期間は約1ヶ月でした。現在入院期間は約11日に短縮し、退院時に身体機能が十分に回復しないまま医療機器を身につけていることも珍しくなくなりました。このことは社会構造や医療政策の変化も影響していますが、入院生活は最小限とし、患者さんが住み慣れた地域で生活することを中心に考える時代になったことを表しています。

看護部の目標の一つである「在宅・地域に向けた保健教育活動の推進」は、時代のニーズに対応しながら継続してきた活動です。医療連携推進部では、多職種がチームとなり患者さんの意思に基づいた治療やケアプランを実施し、地域医療・介護機関と連携した支援体制を整えます。そして看護師は、入院が決定した時点から地域支援機関と連絡をとり、安心して入院生活が送れるように、また治療後速やかに退院できるように看護を提供します。今後更に地域との連携を深めるため、地域に出向き看護を提供することも考えたいと思います。ご来院の際、ご心配事やお困り事がありましたらいつでも医療連携推進部をお尋ねください。

慶應ナースキャップの廃止

1941年から慶應病院の看護師はこの丸い特徴的なナースキャップを愛着と誇りを持って着用していました。2000年前後から他院では廃止になる中、存続の是非が何度も検討され、伝統を重んじる慶應看護の中では断腸の思いで2005年に廃止が決定されました。慶應看護の伝統はキャップが無くなって引き継いでいく事を決意した出来事でした。



■ 慶應看護100年の歩み

- 1918年 医学科附属看護婦養成所 芝白金に開設
- 1920年 慶應義塾大学病院 開院
看護婦は各診療科の医師の下に所属
- 1945年 空襲により病院施設の6割が焼失 患者180名全員を無事に避難救助
- 1950年 戦後の保健婦助産婦看護婦法により医学部附属厚生女子学院と改称
- 1960年 看護婦の各診療科の所属を撤廃し、看護部として組織化
- 1986年 病棟と外来の継続看護体制導入し、病棟看護婦が各外来と連携
- 1988年 慶應義塾看護短期大学 開設
- 2001年 慶應義塾大学看護医療学部 湘南藤沢キャンパスに開設
療養支援室(現 医療連携推進部)開設し、他職種と退院のサポート体制を強化
- 2005年 慶應看護師のシンボルであったナースキャップを感染対策等のため廃止
- 2018年 慶應看護100年

【参考映像】 慶應看護100年記念映像 百年目の卒業生





産科 医師
たなか まもる
田中 守

関連診療科と協力して
母子共に最善の
治療を行います

妊娠から子育てまで、
子どもたちとご家族を
支援します

小児科 医師
ひだまり こ
飛弾 麻里子



お母さんを支える医療

産科のモットーは、慶應病院で出産される皆さんに安全、安心、快適な時間を過ごしていただくことにあります。特に最近では妊婦さんの高齢化に伴い、急な血圧上昇や糖尿病などさまざまな合併症が増えています。中には当院で腎移植を受けた方や、もともと持病をお持ちの方が妊娠されることもあるため、さまざまな診療科の医師と協力して最適な治療を行いながら出産に臨んでいただきます。たとえば、妊婦さんの病気が原因で早産になりそうな場合は、新生児医療を担う専門のチームと相談しながら、母子共にベストなタイミングで出産できるように出産日を調整します。また、超音波検査で胎児に先天性疾患が疑われた場合には、各疾患の専門医と連携して治療方針を作成し、出産前のご説明することで、安心して出産いただけるよう努めます。

このように、慶應病院では母子を取り巻くさまざまな関連診療科が揃っており、突発的な事態に対してもエキスパートの医師たちが協力して迅速に対処することができま。難しい局面を乗り越えて、母子共に無事に退院される

姿を見るとき、産科医として充実感を覚えます。私たちの願いは、産科を受診されるすべての患者さんに笑顔で退院していただくことです。そのために、医師、看護師、助産師ほか、メディカルスタッフ一同、最先端の医療技術と知識を常に習得し、最良の治療が出来るよう取り組んでいます。これからも多くの方に「慶應病院で出産できて良かった」と思っていただけよう、一人ひとりの患者さんに寄り添う診療を進めてまいります。



慶應病院は、地域周産期母子医療センターに指定されています。産科、新生児集中治療室(NICU)、小児科を併設し、各科の医師、看護師を含む多職種の医療従事者が綿密に連携しながら妊娠、分娩、新生児の治療までをトータルに管理しています。また他院で出生した新生児も診療の対象としています。出産される妊婦さんは、健康な方だけでなく、もともと疾病を持つ方や妊娠中に合併症を起こした方もいらっしゃいます。生れてきた赤ちゃんに処置すべき症状が見つかった場合はNICUで集中治療を行い、さらにNICUを離れても注意深く見守る必要のある赤ちゃんに対しては、新生児治療回復室(GCU)での治療を継続します。退院された後も、長期的にフォローする体制が整っています。実際に妊婦さんが当院小児科の患者さんであったケースや、中には今でも通院中という場合もあります。

先日も、妊娠・分娩管理に専門的な配慮が必要な方が無事に元気な赤ちゃんを出産され、母子共に順調な経過で退院されました。ご夫婦だけでなく、双方のご家族にとっても最大の喜びである赤ちゃんの誕生を、周産期クラスターの連

携を通じて支援できることは医療者としても大きな喜びです。いつ、どのような状況にあっても、生まれ出たばかりの赤ちゃんを前に「生まれてきてくれてありがとう」と思えることに、新生児診療に携わる幸せを感じています。1号館完成により、産科と小児科の病棟がワンフロアになったことから、ご家族の面会、各診療科の連携もよりスムーズになりました。周産期クラスターは妊娠期から子育て期まで絶え間なく診療が継続します。これからも子どもたちとご家族を支援する診療体制を益々充実させてまいります。



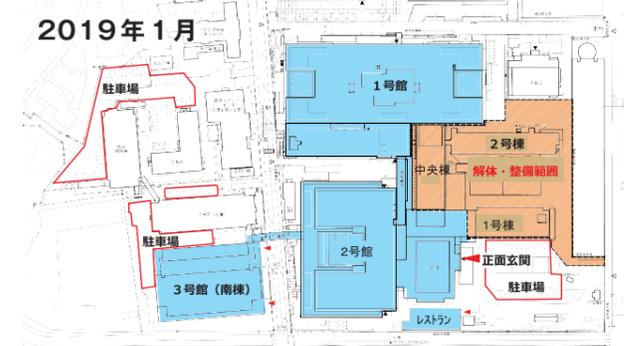
生れてくる赤ちゃんとお母さんを支える医療

病院機能充実に向けて、 更なる施設整備を 進めていきます

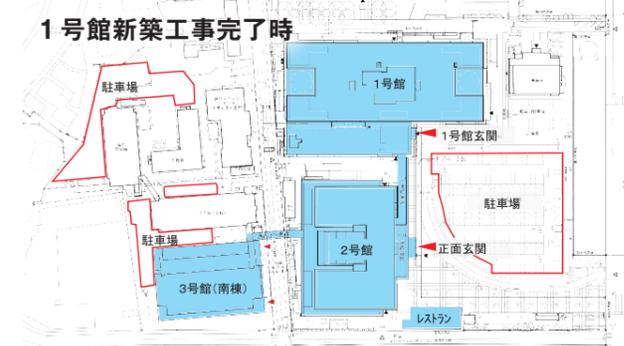


1号館（新病院棟）開院後も引き続き、外来の移転、2号館や3号館の再整備、既存施設・建物の解体、駐車場の整備などが続きます。ご不便をおかけする面も多々ございますが、ご理解、ご協力くださいますようお願いいたします。

駐車場位置変更に伴うご協力のお願い



図のオレンジ色部分が解体準備作業に入るため、駐車場は3号館側に一時移転・縮小します。



1号館正面玄関のリニューアルと併せて駐車場が広がります。



今後の移転・工事スケジュール

今後もさまざまな移転・移動やリニューアルオープンを予定しております。適宜お知らせや詳しいご案内をさせていただきますが、ご不明な点が生じましたらお気軽に病院スタッフにお声がけください。

▶ 2018年9月25日

- 泌尿器科外来：1号館3階へ移転
- 臨床遺伝外来：1号館3階へ移転

▶ 2018年11月頃

- 11月1日
 - 3号館（南棟）5階・6階病棟再開
- 11月5日
 - 眼科外来：3号館（南棟）4階へ移転
 - 歯科・口腔外科外来：3号館（南棟）4階へ移転

▶ 2019年1月頃

- 1号館連絡通路1階部分オープン
- 手術・血管造影センター アンギオユニット：1号館4階へ移転
- 主な駐車場が大京町側へ移転

▶ 2019年2月以降

- 移転・オープン
- 精神・神経科外来：2号館3階へ移転
 - メモリークリニック：2号館3階へ移転
 - スポーツ総合センター（フィットネス）：2号館3階へ移転
 - 採血・採尿室：2号館2階へ移転
 - 2号館5階・6階病棟オープン

工事

- 1号棟、2号棟、中央棟、旧リハビリ棟解体
- エントランス棟新築
- 正面玄関前駐車場整備

尚、工事に伴い、院内内の経路が随時変更になりますので、ご理解、ご協力をお願いいたします。



医療現場の“縁の下の力持ち” – 臨床検査技師 –

臨床検査技師は国家資格で検査業務を担当しています。医師や看護師に比べてあまりご存知ない方も多いかもしれませんが、実は患者さんにご迷惑の多い仕事です。ほとんどの患者さんが検査等で採血をされたことがあるのではないのでしょうか。病棟における早期採血の部や外来採血室での採血は、臨床検査技師が担当しています。患者さんから採取した血液や尿、細胞や組織は様々な手法を用いて分析し、また心電図や超音波検査などは直接患者さんに接して検査を行います。そのほか、輸血の検査や血液製剤管理、体外受精に関わる業務や治療や臨床研究などさまざまな場面で患者さんと関わっています。検査は診断や治療に欠かせないものです。古くは医師が自ら行っていたのですが、医療の分業化と検査の高度化が進み、専門職が必要になりました。現在の医療に臨床検査技師は不可欠の存在となっています。

迅速に、そして正確な検査結果を提供するために、当院の検査室は、検査室の国際的な評価であるISO15189の認定を取得しました。検査室の能力が国際的に保証されたことになります。測定機器や検査方法が、常に精度の高い結果を出すことができます。高い結果を出すことができるように、品質管理、環境の整備、教育訓練などのシステムを整えています。採血室では、安心、安全な採血を目指して、定期的に採血の力量評価や接遇研修、急変時対応の研修などを行っています。

採血室はいつも混雑しており大変ご迷惑をおかけしています。混雑緩和のために、採血の待ち時間だけではなく、検査結果の報告までをよりスピーディーに行うことができますように、更なる業務改善に取り組んでまいります。また、皆さんにご満足いただける検査に努め、一同、信頼される臨床検査技師であり続けたいと願っています。

Information

●患者さん向け情報ツール「おたより」

患者さんより頂きましたさまざまな声への返答や感謝のお言葉を、正面玄関や1号館1階案内係前に掲示してきました。それを簡易印刷版リーフレットとして今年6月より発行。ご意見箱の横に置いてあります。こちら是非ご活用ください。



●外来予約の変更はWebサイトからでもできます。

<http://www.hosp.keio.ac.jp/toi/>
お問合せ一覧の予約の確認・変更にある「Webフォーム」に入力ください。



平成30年度 患者サロン

患者さんご家族、ご友人を対象としたセミナー・交流会を定期的に開催しています。どなたでもご参加いただけます。(参加費・無料)

日程	テーマ	形式	定員	講師	時間
10月27日(土)	がんと就労	交流会	20名	社会保険労務士	午前10時30分～ 午前11時30分
11月28日(水)	がんに負けない体づくり ～管理栄養士からのメッセージ～	講義	50名	管理栄養士 窪田 美紀	午後2時00分～ 午後3時00分
1月23日(水)	がん治療 お金のことが心配? ～高額療養費と医療費控除～	講義+交流会	30名	患者総合相談部 ソーシャルワーカー 加島 明	午後2時00分～ 午後3時30分

ろうと 漏斗胸専門外来 開設(呼吸器外科)

漏斗胸専門外来(呼吸器外科 1号館3B)では、小児外科、心臓外科、麻酔科、形成外科、精神神経科と協力して、最適な治療を行います。漏斗胸でお悩みの患者さんやご家族に、わかりやすい説明を心がけています。胸壁の陥凹や心肺機能の障害の他、外見面で悩むの方は、ぜひ漏斗胸専門外来へご相談ください。



「胸をはって歩こう」

漏斗胸外来初診のご予約

■ 毎週火曜 午後(要予約) 担当医師:政井恭兵
*下記に予約の申し込みをお願いいたします
(外来予約センター) 電話番号:03-3353-1257
(予約受付) 平日・土曜日(第2・4・5) 午前9時00分～午後4時00分

鍼外来 開設(漢方医学センター)

鍼外来(1号館2A)では、慢性的疼痛性疾患や、様々な周辺症状を出現させる神経変性疾患などへの活用を柱としています。首肩こりや腰痛、関節の浮腫みや痛み、生理痛や身体の冷えやお通じの不具合、慢性的な頭痛など、自立神経機能の不調による症状に、臨機応変に対応しております。

鍼外来のご予約

- 第1・第3・第5月曜日午後、毎週金曜日午後(要予約)
- ご予約・問合せ先 漢方医学センター(担当医師:堀場裕子)
電話:03-5366-3824(医局直通)
e-mail:mannta217@keio.jp
- 受診料 初診:10,000円 再診:7,000円
*自費診療になりますので、保険診療との同日受診はできません。
ご予約の際はご注意ください。

2018年度「慶應BLSプロバイダーコース」実施中

BLS (Basic Life Support) とは一次救命処置のことです。呼吸が止まり、心臓も動いていないと見られる人への救命の可能性を維持するための処置の方法です。病院内では、救急センターの医師や看護師が到着するまでの間に、その場に居合わせた人が適切にBLSを行うことが必要になります。当院では、全ての教職員が、急変時の対応力を向上させ救命初期対応力を身につけるため、毎年BLS講習会を行っています。今年度からは「慶應BLSプロバイダーコース」を開催し、週2回、通年で計画的に実施しています。今年度のスタートは4月、新採用者の講習から始めています。看護師、薬剤師、臨床検査技師、放射線技師、医用工学士、理学療法士、言語聴覚士、事務職員など159名が、救急科医師やインストラクターから、胸骨圧迫法・BVMによる人工呼吸法・AEDの使用の指導を受け、演習を行い、参加者全員が「慶應BLSプロバイダーコース」修了者として認定されました。今後も続々と技術習得者が増えて院内の医療安全の一翼を担います。

(慶應義塾大学病院 BLSワーキンググループ)



〈受付時間・休診日〉

外来診療時間 午前8時40分～午後12時00分、午後1時00分～午後4時00分
面会時間 (平日) 午後3時00分～午後7時00分
(土・休日) 午後1時00分～午後7時00分
休診日 日曜日、第1・3土曜日 / 国民の祝日・休日 / 年末年始(12月30日～1月4日) / 慶應義塾の休日(1月10日、4月23日)

〈診療担当医表〉

このQRコードをスマートフォンなどで読み取っていただくと診療担当医表がご覧になれます。なお病院入り口脇の電子掲示板にも掲載しています。

